

よふかし
しようかい

こわいがいっぱい
おはけ
の
はなし



作 辻 貴司

絵 いたうみつる



よくみると、それは はな花では めだまなく、めだま目玉だった。

はな花の めだまかわりに めだまえだじゆうに めだま目玉が めだまついていてた。

そのぜんぶが めだまじゅんやを めだまみおろしている。

めだまかわらぞいに めだまならぶ めだまさくらの めだま木の めだまえだという

めだまえだに めだまむすうの めだま目玉が めだまくつついていた。

めだまにげようにも、めだまもう めだまじゅんやは

めだまおきあがれなかつた。めだま足から めだま力が めだまぬけて、

めだまかつてに めだまぶるぶる めだまふるえるのだ。





おばけの
かつこうをして
あるいている。

「よかった。あのね、ぼく 足が 大きくなって、
うわばきが はきにくかったみたい。だから、
もう さよならなんだ。ごめんね」
『あやまらなくていい。せいちょうするのは、
いいことだ。それより、きょうは
どうしようと みちを あるけるんだろ?』
おばけたちは おっかなびつくり
ユウトの あとを ついて そとへ でた。
大どおりのひろばには たくさんの人が、

